

私の安全衛生業務の紹介 - 衛生管理および作業環境測定を中心に -

和藤 浩

三重大学 工学部・工学研究科 技術部

1. はじめに

私は、三重大学の安全衛生業務として、衛生管理の巡視と作業環境測定を行っている。本報では、これらの業務の紹介や今後の課題を中心に、私の安全衛生業務の紹介について報告を行う。

2. 衛生管理の巡視

三重大学上浜地区事業場の衛生管理の巡視業務は、表1に示すように8区域に分かれ22名で行われている。工学部・工学研究科、S.V.B.L.、環境保全センター、総合研究棟Iを担当する区域(以下、工学部区域)は、工学部・工学研究科(以下、工学部)の技術部の技術職員が4名で担当している。なお、現在、技術部の有資格者は、5名であり、そのうち1名ずつが毎年交代を行って活動を行っている。

(1)安全衛生委員会および衛生管理巡視の概要

三重大学の安全衛生委員会を図1に示す。委員会では、主に以下の項目について検討が行われている。

- ・衛生管理者による巡視結果について
- ・産業医による巡視結果について
- ・巡視結果指摘事項のその後の状況について
- ・病気療養者(こころ、からだ)の状況について
- ・各種健康診断(雇入時、定期、特別、等)の受診状況について など

上記の衛生管理者による巡視結果が、筆者らの毎月ごとの巡視結果の報告であり、巡視については、三重大学旧人事課安全対策室(現:総務部職員チーム)が検討したチェックシートに基づき行っている。以下にチェックシートの項目を簡単にまとめたものを示す。

表1 上浜地区事業場衛生管理者の配置人数(2010年度)

対象部局	人数
事務局、総合研究棟、 共通教育	2
社会連携研究センター、 生命科学研究支援セン ター、キャンパスインキ ュベータ、総合情報処理 センター	2
附属図書館	1
人文学部	1
教育学部(附属教育実践 総合センターを含む)	3
医学系研究科、医学部お よび医学部附属病院)	5
工学系研究科・工学部、 S.V.B.L.、環境保全セン ター、総合研究棟	4
生物資源学研究科・生物 資源学部	4
計	22

三重大学安全衛生 総括会議	上浜地区事業場安全 衛生委員会	工学部安全衛生 委員会
総括安全衛生管理者 (理事)	総括安全衛生管理者 (理事)	専攻長
産業医	産業医	専攻科長
安全管理責任者 (地区代表)	安全管理責任者 (副専攻長等)	チームリーダー
安全・衛生経験者 (職域代表)	安全・衛生経験者 (職域代表)	衛生管理者 (技術部)
衛生管理者 (技術部)	衛生管理者 (技術部)	

図1 安全衛生委員会の構成(2010年度)

a. 一般項目

- ・室内、廊下は安全に通行できるか
- ・転倒防止の有無
- ・配線、明るさ、清潔、騒音の問題
- ・流し、ガス、消化設備
- ・職員の健康状態
- ・非常口の問題
- ・ゴミ置場、トイレ、喫煙所の衛生
- など

b. 特別項目

- ・化学物質の取扱い
- ・高圧ポンベの取扱い
- ・局排の問題
- ・実験機器の異常
- ・RI 関係
- など

なお、チェックシートは漠然としたものが多く、技術部の衛生管理者のなかでは、さらに細かいところまでチェックすることに心がけることの意味統一と定期的に全員での巡視も行うようにしている。

(2) 衛生管理巡視報告

筆者らが巡視した結果は月1回、職員チームに報告を行っているが、最近の筆者が報告した指摘事項の一例を写真 - 1 ~ 4 に示す。

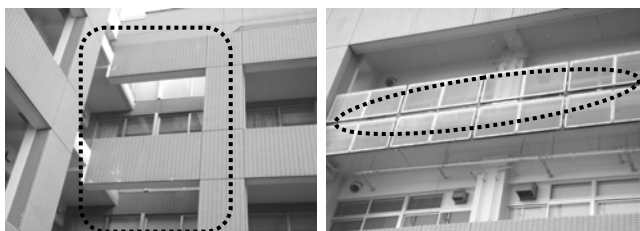


写真1 指摘項目1：

網が張ってない部分から鳥が侵入し、フンの被害がある。

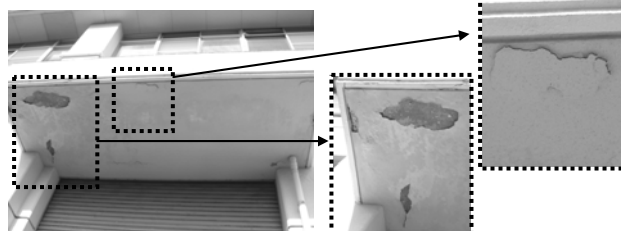


写真2 指摘項目2：

ひさしの仕上げ部分が、剥離している。突然、剥離して落下する危険性がある。

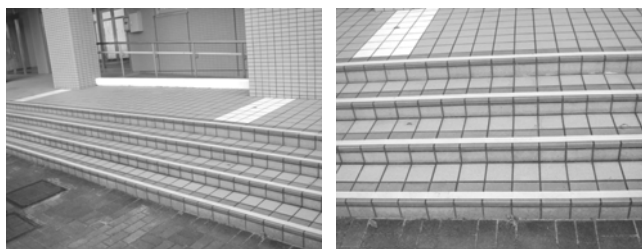


写真3 指摘項目3：

階段が同系色であり、特に夜は分かりにくく、階段を踏み外す時があると、指摘されたため報告した。

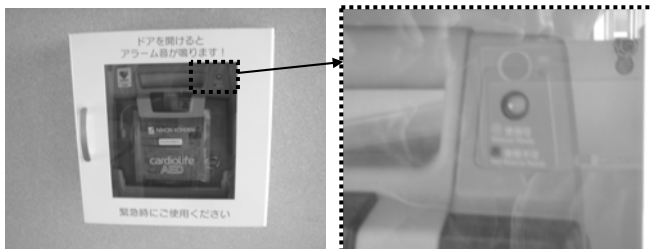


写真4 指摘項目4：

今年度10月から使用可能状態が毎日チェックを行うことになった。

また、工学部区域では、衛生管理者のなかで役割分担を決め巡視を行っているが、前述した定期的な全員での巡視においては、普段気づかない細かい指摘箇所も見つけることができた。

(3) 衛生管理の巡視についてのまとめ

ここでは、衛生管理の巡視の概要や筆者の巡視報告等についてまとめたが、今後、衛生管理業務について以下の問題などが考えられ、さらに検討を行っていく必要がある。

- ・資格者(技術職員)の増員(薬品、測定機器、などの詳細を熟知しているため): 現在5/22名(工学部)

- ・任期の導入（交代制、いろんな観点から）
- ・学内の衛生管理者の情報交換（視点の相違、学内他区域の衛生管理者の意識の向上、など）
- ・巡視項目の見直し（職員チームに要望）
- ・衛生管理者研修の開催（昨年度ごろから外部講師を招き開催）

3. 作業環境測定

三重大学作業環境測定室の立ち上げの経緯は、平成16年に民間の作業環境測定機関が測定に入ったが、毎年何千万の予算が必要、自社測定が原則という理由より、理事より技術部に作業環境測定業務の依頼があった。そして、技術部の5人(当時)が資格を取得し、平成17年から有機溶剤関係と特定化学物質(金属を含む)の測定が始まり、平成18年度からは粉じん、平成20年から放射性物質の測定を行っている。平成20年には、正式に作業環境測定室(辞令)も発足し、現在、室長1名、室員5名の計6名で測定を行っている。

大学の作業環境測定のメリットおよび自社測定(技術職員)の意義は、以下のことが挙げられる。

a. 大学の作業環境測定のメリット

- ・実験室・研究室が安全で快適となる。
- ・学生・教職員は、健康で安心して働ける。
- つまり、研究・労働意欲が向上し、教育・研究の向上につながる。

b. 自社測定(技術職員)の意義

- ・経費削減：年間数千万円の運営交付金
- ・自社測定(原則)：大学内を知り尽くした職員による測定
- ・機器利用：学内の分析機器
- ・分析測定技術取得：学内独自の分析技術開発
- つまり、技術職員の大学貢献、法令遵守、分析技術取得、地位向上につながる。

(1) 対象測定箇所および対象物質

三重大学作業環境測定室では、以下の対象測定箇所および対象物質の測定を行っている(平成22年前期現在)。

a. 対象測定箇所(124室)

有機溶剤：104室、特定化学物質：62室、金属類：7室、粉じん：6室

b. 対象物質(37種)

有機溶剤：20種類、特定化学物質：11種類、金属類：5種類、粉じん：1種類

(2) 作業環境測定のスケジュール

現在、作業環境測定室のメンバーは、6名であり、以前は6名全員で、3年前から3名ずつ2グループに分けてサンプリングや分析等を行ってきた。しかし、人数が多いと誰かに頼りがちになる場合もあり、今年度からは、それぞれ責任もって行えるように、2名ずつ3チームに分けて、表2のようなスケジュールで測定を行っている。

表2 作業環境測定のスケジュール(H22年度)

・有機、特化、金属、粉じん	・RI
前期	4月:Aチーム
4月 消耗品等確認・発注: Aチーム	5月:Bチーム
5月 検量線作成(FID・ECD): Aチーム	6月:Cチーム
5~6月 サンプリング	7月:Aチーム
:Aチーム:約20室、B、Cチーム:約50室	8月:Bチーム
7月 分析(ガスクロ:FTD・原子吸光、UV):	9月:Cチーム
各チーム:分析	10月:Aチーム
8月 報告書作成 9月 安全衛生委員会提出	11月:Bチーム
後期	⋮
10月 消耗品等確認・発注: Bチーム	
11月 検量線作成(FID・ECD): Bチーム	

(3)作業環境測定についてのまとめ

ここでは、作業環境測定の概要等についてまとめたが、今後、作業環境測定業務について以下の問題などが考えられ、さらに検討を行っていく必要がある。

- ・後輩の育成(現在6名・50代の方も数名)
- ・研修予算の更なる確保
- ・セミナーの開催(学内、学外)
- ・対象物質の集約(現在、職員チームで集約)
- ・新規物質の最適な方法の検討(昨年：ホルムアルデヒド、今年：ニッケル、ヒ素)

4. その他の安全衛生業務(辞令あり)

衛生管理者および作業環境測定の他に、三重大学工学部技術部の技術職員に辞令があるものとして、エックス線作業主任者(X線回折などに対して)、プレス機械作業主任者(耐圧および万能試験機などに対して)、酸欠作業主任者(地下槽実験設備に対して)がある。筆者も、写真5に示す耐圧試験機、万能試験機のプレス機械作業主任者となっている。



(a)2000kN 耐圧試験機



(b)1000kN 万能試験機

写真5 プレス機械作業主任者

5. その他の資格業務(辞令なし)

筆者は、辞令はないが、有資格者として配属先の講座(工学研究科建築学専攻・コンクリート研究室)では、アーク溶接、固定式クレーン、移動式クレーン(ユニック)、玉掛け、グライダーの歯の取替試運転など(写真6参照)の業務も行っている。



(a)アーク溶接



(b)固定式クレーン



(c)卓上グラインダー



(d)高速カッター

写真6 その他の有資格業務の一例

6. まとめ

本報では、衛生管理の巡視と作業環境測定を中心に私の安全衛生業務について、業務の紹介や今後の課題について報告を行った。今後、大学においては、さらに安全衛生に関して重要になると考えられ、技術職員はこれらに携わっていかねばならないことは自明であると考えられる。上記で報告した以外にも安全衛生業務に関して、今後、スキルアップしていくことが必要であると考えられる。

[謝辞]

本報告書作成にあたりご協力を得た作業環境測定および工学研究科の衛生管理者の皆様に謝意を表します。